

## BOOK &amp; VIDEO

## 「肝臓癌プラクティカル・セラピー」

茨城県立中央病院院長 長谷川 博 監修

千葉西病院院長 島村 善行 著

国立がんセンター

末 舂 恵 一

監修の長谷川博氏とは、以前国立がんセンターの外科で長い間同じ釜の飯を食った仲間である。その学術における卓越した第六感には、私はとうの昔から兜を脱いでいる。また、肝臓癌の肝切除の大先達であることは広く知られている。長谷川の方法、長谷川の器械、長谷川の……と本書の中にも彼自身の工夫、ひらめきが語られている。

一方、著者の島村善行氏は、1977年から3年間国立がんセンターにおいてレジデントの教育を受け、ここで長谷川博氏に師事して肝外科を専門とすることとなった。レジデント終了後、国立療養所松戸病院の医師となって、同病院に肝外科を開設し、それを隆盛ならしめた。まもなく、対がん十か年総合戦略が始まり、その中で、“肝細胞癌の病態に応じた治療法の選択”という研究班の班長として9年間活躍した。このような長い間の肝臓癌の勉強と、診療の経験が本書の誕生の原動力となっていることは疑いがない。

まず、本書の構成であるが、座談会を冒頭にもってくるユニークな導入である。谷川久一氏、長谷川博氏、島村善行氏の3氏によるもので、こ

れによって肩のこらない over-view を頭に入れることができる。

次の章は、患者の状態と癌の拡がりを中心に治療法の選択についての総論である。肝臓癌の特性、肝機能評価、特有な合併疾患、そして癌腫の位置や大きさなどから、様々な治療法(外科切除、エタノール注入、TAE など)をどう選択するかを述べてある。この章の末尾には、肝臓癌診療における医師と患者の特別な人間関係がインフォームドコンセントを含めて付け加えてある。

第3章は本書の圧巻“手術療法の実際”である。肝臓癌の肝切除について、1つのポイントは皮膚切除である。数多くのバラエティーに豊かな肝切除の経験から生まれる対話は、袈を脱いだ肝切除を教える。実践から生まれたクリティカルポイントをカバーする工夫、コツが沢山語られている。もう1つのポイントとして、門脈、肝静脈、副腎静脈、下大静脈などの脈管処理が述べられる。島村・長谷川の長いダイアローグが随所に挿入され、読者の心をひきつける。

そして各種の肝切除の術式に移る。各区域の切除、亜区域切除、左

右の肝葉切除、中央二区域切除、更に非定型肝切除にまで触れられている。尾状葉の切除の記述は特に丁寧である。

この章は、付帯するビデオによって視覚から細部を会得することができる。ここが本書の最大の特色である。S8の2.5 cm 直径の肝臓癌症例、S7に再発した肝臓癌の再切除例、標準右葉切除例、大腸癌からの転移性肝癌の中央二区域切除である。これらの中に、肝断面出血の処理法、胆汁リークテスト、ドレーンの入れ方のコツ、大静脈シャントチューブの用い方、門脈キットの用い方などもスクリーンに展開される。

最後の章は、術後4日目までの長谷川流輸液、電解質理論と共にその管理を丁寧に記述している。そして、退院時の患者指導にも言及している。

字と図による説明が、ビデオによって読者の血と肉になる書物であり、肝外科を志す者の座右の書、座右のビデオである。

● B5 160頁 図59 写真35  
Video (VHS・45分) 1993 定価  
24,720円(税込) ㊦400

医学書院 刊(㊦03-3817-5657)